

土器と思われる(註6)。南子安遺跡の場合は、壺、甕(鉢)の破片であったが、これは宮ノ台式土器の特徴をよく備えたものである(註7)。道祖神社裏古墳より出土した遺物は、古墳の周溝確認時に出土したもので、甕の破片若干が報告されている(註8)。

さて、本遺跡出土の遺物を、前記3遺跡と比較すると、No.1, 2の遺物はより古く遡るものと思われる、No.3以降の遺物は同時期か、それほど時間差の認められない頃のものといえよう。注目すべきはこのNo.1, 2の遺物である。最初に、No.1の甕(鉢)形土器であるが、条痕が器外面全体に施されているところから、杉原莊介氏の提唱(註9)に従えば、小田原式土器ということになろう。しかし、小田原式土器の内容は充実の一途を増している宮ノ台式土器と比較すると余りに貧弱である。一々の出土資料をもってとやかくいうことはできないが県内において、類品を求めてみると破片のみであり、これと全く同一の特徴を有する壺形土器を私は知らない。「小田原式土器のセットの一器種をなすもの」かもしれないとの予想を与えておきたい。

次に、一片ながら出土した須和田式土器は、もちろん君津市内では初見であるが、県内においてもきわめて類例の少ないものである。

ところで、対岸の上野台遺跡の内、南側端にあ

たる地域は、かつて我々が一部分調査を行っており、そこは、莊台遺跡とは谷をへだてて指呼の間にあり、杉田式、干網式等、晩期後半の、諸型式が出土している。それは、この谷をめぐる、縄文時代～弥生時代にかけて、人間の活動がみられたことを物語っているが、数少ない該期のしかも、継続的な集落の存在が予想しうる地域として注目したい。

(2班・千原台事務所)

註

- 1) 「千葉県君津郡莊台出土の祭祀遺物」、『銅鐸14号』 坂詰秀一 昭33
- 2) 筆者実見
- 3) 「上野台遺跡」、『日本考古学年報29 1976年版』小高春雄 昭53
- 4) 『元秋葉台32号墳発掘調査報告書』野中徹他 昭52
- 5) 『千葉県君津郡君津町誌、後編』 昭48
- 6) 註5文献中に所載
- 7) 「千葉県君津市南子安遺跡出土の弥生土器・土師器」、『いにしえ第2号』小高春雄 昭53
- 8) 『道祖神社裏古墳調査概報』大塚初重他 昭51
- 9) 『弥生式土器集成、本編2』杉原莊介 昭43

関東地方の埴輪生産遺跡

萩原 恭一

1. はじめに

現在、全国における埴輪遺跡の総数は、発見・発掘の両方で40遺跡を超え、又、基数にして170基を超えている。その中でも特に開発の勢いの激しい関東地方では、全国の発見・発掘例の約8割近い130基余りを認める事が出来る。

埴輪窯跡に関する研究は、既に坂詰秀一氏・塩野博氏等に依る集成及び分析が発表されている。坂詰氏は平面・縦断面形態を主眼とし、塩野氏は平面形態を主眼として、その分類を行なっている。

それを簡単に紹介する。

(1)坂詰氏の分類

- ①半地下式無段焚口分離(A)登窯
- ②半地下式無段焚口分離(B)登窯
- ③半地下式無段複室登窯
- ④トンネル式有段登窯
- ⑤トンネル式無段登窯
- ⑥半地下式有段登窯
- ⑦半地下式無段(A)登窯
- ⑧半地下式無段(B)登窯

以上が坂詰氏の分類である。窯は焼成部、燃焼部、焚口、灰原といった部分に分かれているが、焼成部に段があるか無いか、有段・無段の違いである。

(2)塩野氏の分類

- ①馬室タイプ——焚口と灰原のプランが隅丸方形で、その長さが焼成部とほぼ同じもの。
- ②公津原タイプ——灰原と燃焼部とほぼ直線的に連結し、袋状に浅く掘り込まれ、焚口との区別の認められないもの。
- ③富沢タイプ——長方形プランの灰原を持つもの。
- ④馬渡タイプ——扇形に広がる灰原をもつもの。

2. 関東地方の埴輪窯跡の形態分類

現在須恵器窯の分類で主に用いられている分類は窯室を地下式と半地下式に分類し、更に階の有無、段の有無で分類するのが普通である。従って8分類となる。その様な分類に基づいて観察すると、関東地方の埴輪窯は、実は①地下式無階無段窯②半地下式無階無段窯の2種類しか無いのである(註1)。そこで、この2分類の他に焼成部、燃焼部、灰原の各長さ幅、焼成部の傾斜度、操業時期で各窯を見てみると、右記の表ようになる。(但し、これは比較的残りの良かった窯を選んでおり、又、燃焼部の長さは判りづらいものが多いため、一部を除き、焼成部・燃焼部の全長で表示した)。

この表からうかがえるのは、まず、半地下式の方が地下式よりも多いということである。これは、地下式は一般に平坦地に立地し、半地下式は斜面に立地する事に起因すると思われる。但し、公津原・馬渡B区2号窯は傾斜面に立地するが地下式である。又、深谷割山遺跡は平坦地に立地するが全て半地下式である。次に地下式と半地下式の混在する遺跡の幾つか見える点である。馬渡、本郷がそうである(本郷は実測図がA窯のもののみしか残っておらず、データがとれない)。次に焼成部傾斜角度であるが、割山9号窯の5度を最低に、生出塚10号窯の32度迄、巾が広い。但し、各窯跡群内では、それほどのバラつきは見られない。斜面部に立地する窯はどうしてもその斜面の傾斜に左右されるであろうからこの点は理解出来る。し

表1 関東地方の埴輪窯跡数値表(長・巾は単位はメートル)

県	遺跡・窯名	焼成部長(巾)	燃焼部長(巾)	灰原長(巾)	焼成部傾斜	窯形	時期
埼玉	江南・権現山 1	2.1(1.5)	1.2(1.0)	3.3(1.6)	15°	2	
	江南・権現山 2	3.5(1.8)	1.29(2.0)	3.7(2.0)	20°	2	
	深谷・割山 8	3.8(1.5~1.7)		5.6	11.5°	2	6c
	深谷・割山 9	4.25(1.45)		——	5°	2	中半 }
	深谷・割山 10	4.5(1.4)		——	10~15°	2	
	深谷・割山 12	3.0(1.2)		——	8°	2	
	東松山・桜山 6	4.6(1.68)	2.4(1.36)	——	10~30°	2	6c中
	東松山・桜山 8	5.36(1.64)	——	——	19°	2	半~
	東松山・桜山 9	6.04(1.95~2.18)	2.6(1.95)	——	4~25°	2	6c末
	鴻巣・馬室 3	4.4(1.6)		3.4(3.6)	26°	2	6c前 }
	鴻巣・馬室 4	4.1(1.25~1.7)		3.64(2.8)	28°	2	
	鴻巣・生出塚 3	3.12(1.25~1.6)	3.4(1.44)	4.8(3.5)	28°	1	6c中
	鴻巣・生出塚 4	4.2(1.1~1.74)	2.2(1.3)	3.3(2.3)	30°	1	}
	鴻巣・生出塚 10	3.3(1.05~1.92)	0.8(1.44)	2.45(3.2)	32°	1	
	群馬	藤岡・本郷 A	10.2(1.42)		——	22°	1
栃木	佐野・唐沢 3	5.0(1.2)		——	24~28°	2	
茨城	勝田・馬渡 A-1	6.5(0.9~1.7)		——	20~25°	2	5c末
	勝田・馬渡 A-2	4.5(1.1~1.55)		——	20~23°	2	}
	勝田・馬渡 A-3	4.2(0.9~1.5)		——	13~18°	2	
	勝田・馬渡 A-4	3.5(1.3~1.5)		——	20~30°	2	
	勝田・馬渡 A-5	4.8(1.2~1.7)		——	25°	2	
	勝田・馬渡 A-6	5.2(1.2~1.65)		——	20~25°	2	
	勝田・馬渡 A-8	3.8(1.2)		——	20°	2	
	勝田・馬渡 B-2	5.2(1.1~1.5)	1.75(1.1)	——	30°	1	
	千葉	成田・公津原	7.6(1.6)	3.5(2.0)	5.5(2.66)	12°	1
木更津・畑沢		8.1(1.4)		——	22°	1	5c末

かし、割山、生出塚のように共に平坦地に立地していながら、片や緩傾斜、片や急傾斜というのは何故か? 多分、半地下式と地下式の構造の差がその辺に現われているものと思われる。

次に平面形態について。

塩野氏の行った分類を先に書いたが、これを整理して考えて見たい。

まず焼成部についてであるが、これは弾頭形を示すものと、方形を示すものの二種に大別出来ると考えられる。これは煙道の処理の仕方も違って来るものと思われる。次に焚口のくびれの有無。そして扇形に開く灰原と、方形の灰原。そして灰原の区画の明瞭なものと、グラグラと斜面へ連続していくものである。これ等の要素を組み合わせ

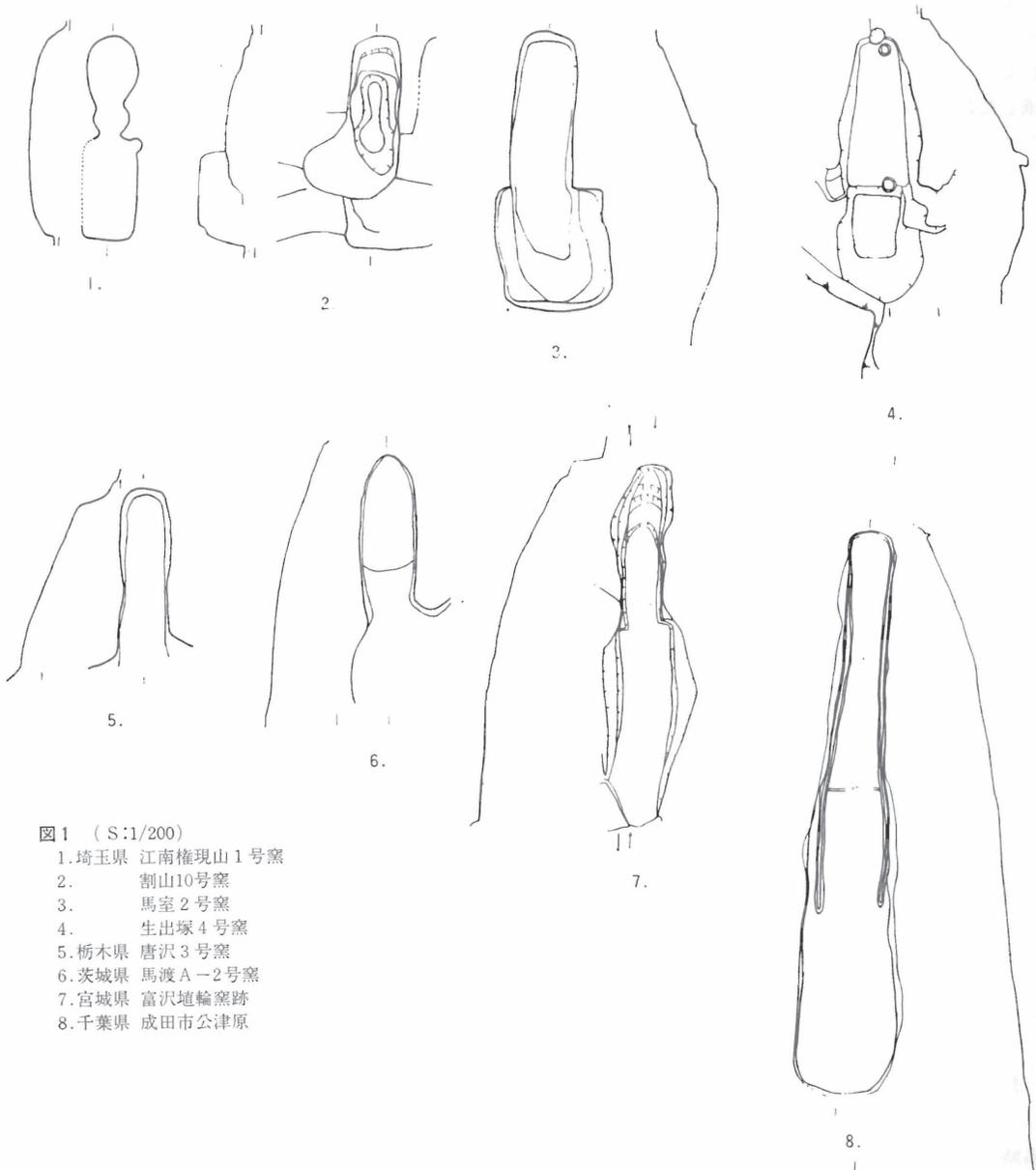


图1 (S:1/200)
 1. 埼玉県 江南権現山1号窯
 2. 割山10号窯
 3. 馬室2号窯
 4. 生出塚4号窯
 5. 栃木県 唐沢3号窯
 6. 茨城県 馬渡A-2号窯
 7. 宮城県 富沢埴輪窯跡
 8. 千葉県 成田市公津原

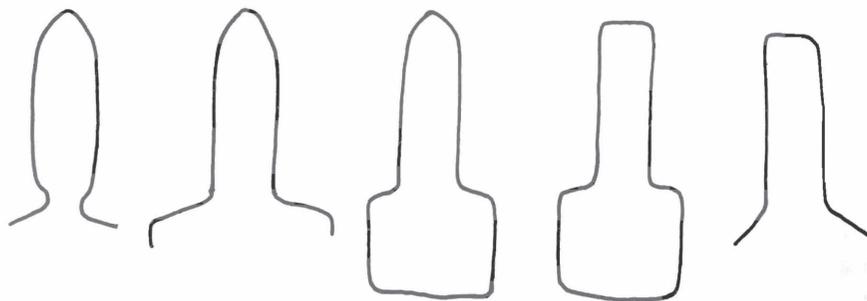


图2 埴輪窯平面形態分類模式図

るとかなりの種類が出来上がってしまうが、実はそれが全部存在するわけではなく、第2図に見られる5つの形と、それにつけ加えて、塩野氏の指摘した公津原タイプ、それにこれは指摘しなかったが、三室分室構造を持つ江南権現山1号窯タイプがあるわけである。

ここで一つ疑問が生じる。灰原の区画が明瞭なものは主に平坦地に立地するものに見られるのだが、馬室・公津原例は斜面に立地していながらその区画を明瞭にしている。

3. 窰窯焼成技術と埴輪生産

埴輪窯を見る場合、最も注目されるのは、須恵器窯との比較である。関東地方で現在発掘されている須恵器窯の中で最も古いとされているのは東松山桜山窯跡群の、埴輪窯と同一斜面に設けられている2基の窯である。共に6世紀前半のものと考えられている。平面形態や傾斜角度は同じ窯跡群内の埴輪窯と殆ど変わらない。しかし、形態の相似など以外に、桜山窯跡群の示している問題は大きい。東海地方において、須恵器の窯で埴輪が併焼されている(註2)事は、既に指摘されている事だが、桜山では併焼はされていない。桜山窯跡群の呈示している問題点を要約すると次の二点になる。

- ① 埴輪窯17基に対して須恵器窯2基という数の不均衡。
- ② 須恵器窯が短期操業に終わっているのに対して、埴輪窯は斜面を一杯に使い、ヤツデ状に窯を伸ばしている。その操業期間も半世紀前後と長い。

この二つの問題点の中には、埴輪と須恵器が、当時の社会の中で、どのように扱われていたか？という事の答えが隠れていると思われる。

埴輪は古墳祭祀のために作られるものであって、集落内において消費されるべきものではない。須恵器は生活用具としての機能を持つが、果たして最初からそうであったのだろうか？関東地方の古手の須恵器が、多く、古墳の主体部、周溝内等から検出されるのに対して、一般集落からの検出報告例は多くない。結局、須恵器も、日本に伝来した頃は、日常汁器としてよりも祭祀用具として使用され、又、そのように扱われて来たのではなかろうか？埴輪はその起源が弥生時代の特殊器台に

求められているように、長い歴史を持ち、又関東地方においても、一部では4世紀代、全体としては5世紀前半には、既に古墳祭祀に用いられている。つまり、遅れて入って来た須恵器に比べて、埴輪の方が祭祀上重要度が高かったのであろう。勿論、桜山で須恵器を焼いていた工人達は、別の所に窯を作って生産を継続していたではあろうが、数の不均衡や、操業期間の違いの原因は、そういった点にも求められるものと思われる。

次に窰窯焼成技術の普及の問題である。窰窯焼成技術は、恐らく、5世紀代に、須恵器の焼成技術として大陸より伝播もしくは導入されている。しかし、石部正志氏らの指適にもあるように、果たして須恵器生産を主目的として窰窯焼成技術を導入したのがどうかについては、大きな疑問が残る。現在の埴輪研究においては、5世紀前半頃に野焼きから窰窯焼成に技術転換が図られたとされている。その全国への波及速度はかなり速く、殆ど畿内と時期を同じくしているものと考えられる。現在、関東地方の窰窯焼成に依る埴輪は、5世紀後半の早い段階から認められる。一方関東地方の集落遺跡から検出された須恵器で搬入品でなく、地方窯産であると考えられるものの中で最も古いのは、埼玉県児玉郡児玉町ミカド遺跡出土のもので、陶邑編年の第I型式第3段階相当のものと見られている。実年代としては、5世紀第3四半紀頃が与えられようか。この児玉地域では、窰窯焼成の埴輪としては、生野山將軍塚古墳、金鑽神社古墳生野山9号墳、長沖14号墳出土例が古く位置づけられ、特に前二者は、本報告は為されていないが、外面に格子、蓆縄文の叩きが施されており、須恵器生産との密接な関係の想定される、非常に興味深い資料である。これ等の埴輪は、窰窯による生産が開始された時期のものであろうと考えられる。

関東地方の他の地域の最古の地方窯産の須恵器が、現在どの程度迄古く持って行けるのか、正確なことは判らないが、ミカド遺跡例ほど古くなる可能性は殆ど無いと思われる。だが、埴輪に関しては、下総・相模・安房を除いて5世紀後半代に窰窯焼成に依る埴輪生産の開始されている事が、関東の各地で確認されている。このように考えると、関東地方全体を見た場合、埴輪生産における窰窯導入の時期の方が、須恵器の地方窯成立よりも早いのではないかと思われる。但し、今迄、5

世紀代の須恵器というと、すぐに搬入品で処理されていたので、このことに関しては、再検討が必要であろうから、あくまでも可能性にとどめておく。

だが、もしも埴輪の窯の出現の方が先であったとしても、それには須恵器窯や、須恵器工人の関与、もしくは影響というものを抜きにする事の不可能なことは言うまでもない。

4. おわりに

以上であるが、本稿では紙数の制限があるため、埴輪そのものや窯構造と製品の相関関係、工人活動、及びその需給状況については全く触れる事が出来なかった点をお詫びする。

(8班・東金事務所)

註

- 1) 関東地方以外では山口県萩市大井埴輪窯跡が地下式無階有段、長野県鬼戸2号窯が半地下式無階有段の窖窯である。
- 2) 名古屋東山10号、11号窯等に報告例が見られる。

参考文献

大塚初重・小林三郎「茨城県馬渡における埴輪製作址」明治大学 昭51
『公津原』千葉県企業庁他 昭50

塩野博他「馬室埴輪窯跡群」埼玉県教育委員会 昭53
「生出土塚遺跡」鴻巣市遺跡調査会 昭56
「割山遺跡」深谷市割山遺跡調査会 昭56
「桜山窯跡群」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 昭57
小沢国平「江南権現山埴輪窯址」『台地研究No.14』台地研究会 昭39
大川清『栃木県佐野市安蘇山麓古代窯業遺跡』昭39
津金沢吉茂他「群馬県藤岡市本郷埴輪窯跡出土の埴輪について」『群馬県立歴史博物館紀要』第1号 昭55
安藤鴻基「千葉県木更津市埴輪窯址の調査速報」『古代』57号
坂詰秀一「埴輪窯跡序論」『立正史学』28号 昭39
「富沢窯跡」古窯跡研究会 昭49
小田富士男他『立山山窯跡群』八女市教育委員会 昭47
「金屋遺跡群」埼玉県児玉郡児玉町教育委員会 昭56
「長沖古墳群」埼玉県児玉郡児玉町教育委員会 昭50
川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64巻2号 昭53
中村浩『窯業遺跡入門』ニュー・サイエンス社 昭57
中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 昭56
石部正志「技術の発生と伝播・定着」『技術の社会史1』有斐閣 昭57

千葉県東南部地区における方墳の様相

栗田 則久

I

千葉市東南部地区においては、昭和49年度に椎名崎古墳群(第1次)が調査されたのを契機として多くの古墳群が発掘され、その内容が明らかになってきた。それに伴い、古墳時代後期における古墳群が東南部地区においてどのように展開していったのかが徐々に解明されるような状況を呈してきている。本地区における古墳群のあり方の解明はひいては上総・下総の接壤地帯における後期・終末期古墳群の把握につながるものであり、非常に興味深い資料となり得るものであろう。ただしこのためには各古墳の様相、古墳群としての

とらえ方に十分な検討を加える必要があるため、現時点では全体に波及することは控えておく。そこで本稿では、古墳群中において、立地等特徴的な傾向を示す方墳について若干の私見を述べていきたいと思う。

Ii

東南部地区において方墳を含む古墳群は、現在までのところ、ムコアラク遺跡(註1)、六通金山遺跡(註2)、大膳野北遺跡(註3)、大膳野北貝塚(註4)、木戸作貝塚(2次)(註5)の計5遺跡で認められる。これらの古墳群が東南部地区において、